

・元気がない中高年を笑わせよう

自分が歳を取ってきて、残った人生を考えたとき、元気がない中高年を笑わせようと決心しました。よしこのネタでいこうと。受けようが、受けまいが、別に有名にならなくていい。マイナーな舞台で、こういう芸人がいたんだという思い出話の一つでも残ればいいと。それで食べていける分の仕事はあるんじゃないかと。この仕事以外で、アルバイトもしないでね。

・自分から売り込まなければ

結局みんな世に出るチャン

スをうかがっているわけで、自分から売り込まなければチャンスをつかめないんです。でも、私はダメなんです。誰かにスリ寄って行って「仕事をください」といえないんです。また、そこまでして仕事をしたくないんです。

もちろん、私が知っているかぎりでも、たいした芸は持っていないけれども、テレビ局に日参して、いろいろなところに自分を売り込んで、テレビに出るチャンスをつかんだ人は何人もおります。そういう人たちは、芸にたいする評価よりもキャラクターにたいする評価が大きいんです。

・寄席ならではの「間」とタイミングがある

そこで、決意したんです。少ないお客さまの一人ひとりを笑わせてこそ本物だと。笑わぬなら、笑わせてみせよう寄席の客。これを乗り越えなければ本物の芸人になれないと、あらゆる持ちネタを試してはスベリ、スベっては試して一年半……。

そして、わかったのです、寄席ならではの「間」とタイミングがあることが。人間、苦勞してこそ成長するものでございます。お客さまはナマモノです。時と場所によって呼吸も変わります。みんな微妙な「間」のなかで生きているのです。それがわかってから私は、同じステージを二度踏めなくなりました。現場でお客さまの反応を見ながら、ネタを組み立てるクセがついてしまったのです。

・笑いながらも「そうなんだ」といえる話

私の芸の基本は、「しやべる」「伝える」ですが、プラス「笑いに教えがある」を信条としています。教えとは真実であり、話のなかに「そうだよな」とか「そう、そう」とお客さまが納得して思わず吹き出す話が入っていないと、お客さまはうなずかないし、笑ってくれないという哲学を持っているんです。笑いながらも「そうなんだ」といえる話。そういう話をしたいんです。

・サラリーマンの世界よりはずっと厳しい世界

われわれ芸人なんていうのは、力があるかないかの差しかなく、サラリーマンの世界よりはずっと厳しい世界です。蕾のまま散る人もいれば、蕾にもならないまま消えていく人もいっぱいおります。

もともと芸人をめざす人は、朝九時から夕方五時までの仕事ができない人たちなんです。人に、これをしなさい、あれをしなさい、といわれたくない、管理社会とは無縁の人たちが芸人なんです。

だから、自分で仕切れる仕事が最高だと考えている。それでいて目立ちたいという欲求が人一倍強い。お互い「なあなあ」で仲よくはしているけれども、裏には闘いがあるわけです。足の引っ張りあいもある、チクリもある、私のサラリーマン川柳事件じゃないけれども。意外と身内からなんです、ああいうのは。

・誰が美人か、誰が美人じゃないか、甲乙つけがたくなるのが五十歳以降

美人の人生は五十まで、美人じゃない人の人生は五十から、です。そこから美人じゃない人は有利です、身体が丈夫だから。

どんな美人も、どんな美人じゃない人も、五十歳になったら「おばさん」という一つの単語でくくられちゃうんです。60歳を過ぎたら「ババア」という一つの単語しか存在しないんです。

なぜか。みんな同じ顔に見えるからです。ファッションも同じにしか見えなくなります。だいたい同じような店で買っているからです。なかには着飾っているマダムもいらっしゃいますが、家に帰ってジャージをはけば、すぐに「おばさん」か「ババア」に早戻りです。

誰が美人か、誰が美人じゃないか、甲乙つけがたくなるのが五十歳以降です。勝負はそれからです。**あとは身につけるものとスタイル**です。美人じゃない人は勝負をかけるしかありません。いままで美人の陰で我慢してきたのですから。エステに通って身を引き締め、クロコダイルとか宝石とか本物で自分を飾ればいいんです。つまり、**金力の勝負**となるわけです。